巻 頭 言

阪神高速の技術屋魂

常務執行役員　関本　宏

「技報」も巻を重ねて、第 28 号が刊行されたことは誠に喜ばしい限りです。

さて、「技報」は、昭和 56 年 11 月に創刊されました。思い起こせば、入社して 2 年目の私がその発刊の下働きに携わりました。今回、巻頭言の原稿依頼があったので、懐かしさもあって自宅の本棚に眠っていましたその創刊号を手に取りました。

それを見開いて、その当時の技術担当理事が記された「発刊にあたって」の文章に目が止まりました。

「わが公団の技術陣は、都市部における高速道路の建設技術において最先端を進むものとしての自負と自覚に燃え、先輩公団に追いつけ、追い越せ、を目標として技術の向上に切磋、琢磨し、･･･」

「当公団も人間でいえば成人式を迎え、まさに精気発剌たる青春を謳歌する時である。･･･前途は洋々たるものがある。」

「21 世紀へ向かっての技術開発への挑戦の時代である･･･これからの時代の要請に対応出来る新しい手法、新しい技術の研究開発に、今迄より以上に勇気をもって立ち向かって行かねばならない。･･･技術者諸君のたゆまぬ努力と健闘を祈る次第である。」

当時は、公団設立 20 周年を迎えんと、この年には大阪・神戸線が全通され、湾岸線の建設が本格化していく時でした。この文章を読んだ時にその歯切れの良さとその頃の技術屋の気概、意気込み、まさに「魂」の発露を目の当たりにしたようで、何とも言えない感慨を持ちました。何人かの先輩諸氏の顔も浮かんできました。

当社は、昨年、供用 50 年、民営化 10 年を迎えました。「新たなｽﾃｰｼﾞへ、前進！」に向けて、今年の 4 月には、2030 年の「ありたい姿」、さらにはもう一段、「挑戦」という高みを目指した「阪神高速ｸﾞﾙｰﾌﾟﾋﾞｼﾞｮﾝ 2030」が策定されました。「技術戦略 2016」も発信されました。

この「ﾋﾞｼﾞｮﾝ」や「技術戦略」が社員一人ひとりの日常業務を進める上での何らかの道しるべとなり、そして、それが社内に着実に展開され、会社風土、組織風土に醸成できるように努めなければなりません。

それには、前述の先輩諸氏が脈々と築かれてきた「阪神高速の技術屋魂」が欠かせないものです。技術やﾉｳﾊｳの継承、伝承に留まることなく、その「魂」が共有され、将来に渡っても育まれなければなりません。

折しも「技術戦略 2016」の「技術者育成・強化戦略」で位置づけられた「技術系人材育成ﾏｽﾀｰﾌﾟﾗﾝ」では、現状の課題として、会社から「やらされる」のではなく，自らの「気づき」「やる気」が必要とされ、技術系社員には、情熱（Passion）を持つことが重要と記されています。まさに的を射た取り組みと思っています。

阪神高速の技術屋がそれぞれの思い、情熱を持って、組織として結集し、「記憶に残る仕事」が成就できるよう、改めて「技術者諸君のたゆまぬ努力と健闘を祈る次第である。」